

b. 防除率による判定

対対照 — 供試薬剤の防除価と対照薬剤の防除価との比較による判定 —

記号	対照薬剤との防除価の差
A	+10 以上
B	+ 9 ~ -10
C	-11 ~ -20
D	-21 以上

対無処理 — 赤焼病, 新梢枯死症の場合 —

記号	防除価
A	80 以上
B	79 ~ 65
C	64 ~ 50
D	49 以下

対無処理 — 防除価による判定 —
(炭疽病, 輪斑病など)*

表記法	防除価
A	90 以上
B	89 ~ 75
C	74 ~ 60
D	59 以下

* = 赤焼病, 新梢枯死症を除いた他の病害に適應する。

II 虫害防除

試験実施要領

供試薬剤はいずれも効力のほかに薬害の有無も併せて観察し, 薬害を生じた場合はその症状を記録すること。防除率の数字は小数第2位を四捨五入すること。

なお, 展着剤は原則として加用しない。特に必要な場合は依頼会社が計画書に記載する。

(1) チャノコカクモンハマキ防除試験

試験方法

区制と面積: 3区制 1区 5m² 以上

散布時期: 若齢幼虫発生期 (試験成績の「対象病虫害発生状況」欄及び概評の「備考」欄に発蛾最盛期を記す)

散布量: 200~400l/10a

調査時期: 中~老齢幼虫期 (散布2~3週間後)

調査方法: 各区の全巻数を数える。ただし, チャハマキと混在している場合は幼虫数を数える。(試験成績には摘採面 1m² あたりの巻葉数または虫数で記す)

対照薬剤: 原則として下記の中から選んで使用する。

ランネット 45DF (45%) 1,500倍

ロムダンフロアブル (20%) 1,000倍

アファーム乳剤 (1%) 1,000倍

フェニックスフロアブル (18%) 2,000倍

(2) チャハマキ防除試験

試験方法

区制と面積：3区制1区10m²

散布時期：若齢幼虫発生期（試験成績の「対象病虫害発生状況」欄及び概評の「備考」欄に発蛾最盛期を記し、試験成績には発蛾最盛期の調査方法（誘蛾灯またはフェロモントラップ）も記す）。

散布量：200～400l/10a

調査時期：中～老齢幼虫期

調査方法：各区の全巻数を数える。ただし、チャノコカクモンハマキと混在している場合は幼虫数を数える。（試験成績には摘採面1m²あたりの巻葉数または虫数で記す）

対照薬剤：原則として下記の中から選んで使用する。

トクチオン乳剤（45%）1,000倍

ロムダンフロアブル（20%）1,000倍

アファーム乳剤（1%）1,000倍

フェニックスフロアブル（18%）2,000倍

(3) チャノホソガ防除試験

試験方法

区制と面積：3区制，1区5m²以上

散布時期：卵～若齢幼虫期（試験成績の「対象病虫害発生状況」欄及び概評の「備考」欄に発蛾最盛期を記す）。葉裏への産卵を確認した後，散布すること。

散布量：200l/10a

調査時期：摘採期（摘採期にあたらぬ場合は散布10日以後を目安にする）

調査方法：各区の全三角巻葉数を数える。発生が多い場合は各区4カ所で25×50cmのわく内の巻葉数を数え合計する。（試験成績には摘採面1m²あたりの三角巻葉数で記す）

対照薬剤：ノーマルト乳剤（5%）2,000倍

モスピラン水溶剤（20%）2,000倍

ロディー乳剤（10%）1,000倍

モスピランSL液剤（18%）2,000倍

フェニックスフロアブル（18%）2,000倍

(4) ヨモギエダシャク防除試験

試験方法

散布時期：卵～中齢幼虫期

散布量：200l/10a

調査時期：散布3日後，7日後

調査方法：ほ場試験が望ましいが，発生が少ないときは室内試験でもよい。室内試験の場合は虫体散

布をさけ、ほ場に薬剤散布して乾いたのち、枝条をとってきて水さしをし、中齢幼虫を放飼して死亡率を調査する。供試虫数は1区20頭以上とし、3反復で行う。なお、飼育は網箱を用いて密閉しないなど、ほ場条件に近づける。

対照薬剤：カルホス乳剤（50%）1,500倍
ノーマルト乳剤（5%）2,000倍
フェニックスフロアブル（18%）2,000倍
アフアーム乳剤（1%）1,000倍

(5) チャノミドリヒメヨコバイ防除試験

試験方法

区制と面積：3区制，1区10m²以上

散布時期：開葉期（散布時の葉期を記載する）

散布量：200l/10a

調査時期：散布前，散布2日後，7日後（虫数調査），摘採期（被害調査：目安として散布14日後）

調査方法：虫数調査……サクシオンキャッチャー，捕虫網またはたたき落とし法（各区4ヶ所）により行い，成幼虫別に虫数を数える。

被害調査……各区3ヶ所のわく摘みによる被害芽率調査を行う。（試験成績に被害芽の調査基準を記す）

生育調査……各区の生育状況を良・やや良・やや不良・不良の4段階のグレードに分け調査する。

$$\text{防除率(\%)} = \left(1 - \frac{Cb}{Tb} \times \frac{Ta}{Ca}\right) \times 100$$

ただし，Cb = 無処理区の散布前生息数。

Tb = 処理区の散布前生息数。

Ca = 無処理区の散布後2，7日後の生息数の合計。

Ta = 処理区の散布後2，7日後の生息数の合計。

（注：生息数は成虫，幼虫数の3区平均値）

$$\text{被害防止率(\%)} = \left(1 - \frac{T}{C}\right) \times 100$$

ただし，C = 無処理区の被害芽率。

T = 処理区の被害芽率。

対照薬剤：原則として下記の中から選んで使用する。

コテツフロアブル（10%）2,000倍
ハチハチ乳剤（15%）1,000倍
スタークル／アルバリン顆粒水溶剤（20%）2,000倍
ウララ D F（10%）1,000倍

(6) クワシロカイガラムシ防除試験（春夏期試験）

試験方法

区制と面積：3区制，1区10m²以上

散布時期：幼虫ふ化最盛期（粘着トラップ等により確認する）

散布量：1,000l/10aを基準とし樹高により適宜増減する。

調査時期：雄繭発生期（雄繭発生量調査）または散布2～3週間後（幼虫死亡率調査）

調査方法：雄繭発生量または幼虫死亡率を調べる。

雄繭発生量調査は，各試験区の雄繭発生量を5ヶ所以上達観観察し，以下の基準により多，中，少，無の4段階に区分・指数化する。

多（3）：雄繭が株の1/2以上にみられ幹を環状に覆う

中（2）：雄繭が株の1/4以上にみられるか，枝幹の一部に集中し，枝幹を環状に覆う

少（1）：雄繭が枝幹に点々とみられる

無（0）：雄繭の発生が見られない

幼虫死亡率調査は，寄生枝を採取し，幼虫100頭の生死を調査し，補正死亡率を算出する。但し，無処理区で死亡率が高くなり，補正死亡率が非常に低くなった場合，死亡率を判定基準の参考とする。この場合，備考欄に明記する。

対照薬剤：スプラサイド乳剤40（40%）1,000倍

アプロードエースフロアブル（ブプロフェジン20%，フェンピロキシメート4%）1,000倍

(7) ツマグロアオカスミカメ防除試験

試験方法

区制と面積：3区制，1区10m²以上

散布時期：萌芽期

散布量：200l/10a

調査時期：第3葉開葉期

調査方法：各区の被害芽数を数える。発生が多い場合は各区4カ所で25×50cmのわく内の被害芽数を数え合計する。

対照薬剤：ランネート45DF（45%）1,000倍

ロディール乳剤（10%）1,000倍

スタークル／アルバリン顆粒水溶剤（20%）2,000倍

(8) チャノキイロアザミウマ防除試験

試験方法

区制と面積：3区制，1区5m²以上

散布時期：萌芽期～2葉期（散布時の葉期を記載する）

散布量：200l/10a

調査時期：散布前，散布2日後，7日後（虫数調査），摘採期（被害調査）

調査方法：虫数調査……各区の任意20芽について読取法又は洗浄法あるいは各区4ヶ所のたたき落とし法により，成幼虫別に虫数を数える。

被害調査……各区20×20cm枠内2ヶ所について，わく摘みにより被害芽率を調査する（試験成績に被害芽の調査基準を示す）。

$$\text{防除率(\%)} = \left(1 - \frac{Cb}{Tb} \times \frac{Ta}{Ca}\right) \times 100$$

ただし，Cb = 無処理区の散布前生息数。

Tb = 処理区の散布前生息数。

Ca = 無処理区の散布後2，7日後の生息数の合計。

Ta = 処理区の散布後2，7日後の生息数の合計。

（注：生息数は成虫，幼虫数の3区平均値）

$$\text{被害防止率(\%)} = \left(1 - \frac{T}{C}\right) \times 100$$

ただし，C = 無処理区の被害芽率。

T = 処理区の被害芽率。

対照薬剤：原則として下記の中から選んで使用する。

コテツフロアブル（10%）2,000倍

ハチハチ乳剤（15%）1,000倍

ウララD F（10%）1,000倍

(9) カンザワハダニ防除試験

試験方法

区制と面積：3区制，1区5m²以上

散布時期：摘採21日以前（茶芽のステージ……萌芽前，開葉後などを明記する）

散布量：400l/10a

調査時期：散布当日（散布前），散布7日後，14日後，21日後

調査方法：各区から葉20枚（3葉以上開いた若葉があるときは，若葉と古葉10枚ずつ）を任意にとり，成虫数と幼・若虫数を数える。発生が少ない時は調査葉数を適宜増加する。（試験成績には20枚に換算して記す）

各薬剤（対照薬剤を含む）の防除率の計算は次式による。

$$\text{防除率(\%)} = \left(1 - \frac{Cb}{Tb} \times \frac{Ta}{Ca}\right) \times 100$$

ただし，Cb = 無処理区の散布前生息数。

Tb = 処理区の散布前生息数。

Ca = 無処理区の散布7日後・14日後・21日後の生息数の合計。

Ta = 処理区の散布 7 日後・14 日後・21 日後の生息数の合計。

(注：生息数は成虫，幼・若虫数の 3 区合計)

判定方法：無処理区で極端に発生が少なくなった場合，発生が多く見られた調査日までの結果から判定を行う。この場合，その旨備考欄に明記する。

対照薬剤：原則として下記の中から選んで採用する。

バロックフロアブル (10%) 1,000 倍

マイトコーネフロアブル (20%) 1,000 倍

ミルベノック乳剤 (1%) 1,000 倍

ダニゲッターフロアブル (30%) 2,000 倍

(10) サビダニ類防除試験

試験方法

区制と面積：3 区制，1 区 5m² 以上

散布時期：発生期 (随時)

散布量：400l/10a

調査時期：散布当日 (散布前)，7 日後，14 日後に調査

調査方法：各区より任意に展開葉 20 葉を選び，葉裏の成・若虫数を数える。

密度が高いときは葉の一部の調査とする。チャノサビダニについては，葉の表裏，密度の高い時は葉表のみの成・幼虫数を数える。

防除率の計算はカンザワハダニに準ずる。

発生程度別基準：

発生程度	無	少	中	多	甚
寄生葉率 (%)	0	1～10	11～30	31～70	71 以上

試験成績には発生程度と寄生葉率ともに記載する。

対照薬剤：サンマイトフロアブル (20%) 1,000 倍

コテツフロアブル (10%) 2,000 倍

ダニゲッターフロアブル (30%) 2,000 倍

*いずれもチャノナガサビダニのみの適用

(11) チャノホコリダニ防除試験

試験方法

区制と面積：3 区制，1 区 5m² 以上

散布時期：発生期 (随時)

散布量：400l/10a

調査時期：散布当日 (散布前)，7 日後，14 日後に調査

調査方法：各区より 30 ケ芽を任意にとり，上位の展開葉 1～2 葉の葉裏の成・幼虫数を数える。

密度が高いときは葉の一部の調査とする。

防除率の計算はカンザワハダニに準ずる。

発生程度別基準：	発生程度	無	少	中	多	甚
	寄生葉(芽)率(%)	0	1～10	11～30	31～70	71以上

試験成績には発生程度と寄生葉率ともに記載する。

対照薬剤：サンマイトフロアブル（20%） 2,000 倍

コテツフロアブル（10%） 2,000 倍

(12) ハスモンヨトウ防除試験

試験方法：ヨモギエダシャクに準ずる

対照薬剤：ファルコンフロアブル（20%） 8,000 倍

フェニックスフロアブル（18%） 2,000 倍

(13) ネコブセンチュウ防除試験

試験方法

区制と面積：3区制，1区 3m² 以上

散布時期：11月～3月を除いた時期

散布量：供試薬剤の処理法に従う

試験方法：供試薬剤の処理法に従う

調査時期：処理前，処理3ヶ月後

調査方法：各区任意5ヶ所から土壌を採取し，ベルマン法（土壌 20g，25℃，72時間）により遊出したセンチュウ数を計数する。また，処理3ヶ月後に各区10株掘り取根こぶ発生量を調査し，指数値に換算する。

被害程度基準

4（多）：根茎の全体に多く認められ，時に直根に大きなゴールがある。

3（中）：中程度認められ，直根に特に大きなゴールはない。

2（少）：根茎の全体にわたって少数散見される。

1（微）：一見しただけでは目立たないが，ごく少数見られる。

0（無）：全く見られない。

根こぶ指数 = $100 \times \Sigma (\text{指数} \times \text{同左指数に該当する株数}) / 4 \times \text{調査株数}$

対照薬剤：ディ・トラベックス油剤(D-D 40%，メチルイソチオシアネート 20%) 20l/10a(1穴あたり 2ml)

(14) コミカンアブラムシ防除試験

試験方法

区制と面積：3区制，1区 6m² 以上

散布時期：開葉期（散布時の葉期を記載する）

散布量：200l/10a

調査時期：散布前，散布2日後，散布7日後

調査方法：各区の全寄生芽数を数える。発生が多い場合は一定面積内の寄生数を調査する。

$$\text{防除率} = \left(1 - \frac{Cb}{Tb} \times \frac{Ta}{Ca}\right) \times 100$$

ただし，Cb = 無処理区の散布前寄生芽数。

Tb = 処理区の散布前寄生芽数。

Ca = 無処理区の散布2，7日後の寄生芽数の合計。

Ta = 処理区の散布2，7日後の寄生芽数の合計。

(注：寄生芽数は3区平均値)

対照薬剤：アクテリック乳剤(45%) 1,000倍

ダントツ水溶剤(16%) 4,000倍

ウララ D F(10%) 2,000倍

(15) チャトゲコナジラミ防除試験

試験方法

区制と面積：3区制，1区5m²以上

散布時期：若齢幼虫発生期(薬剤の特性，試験実施時期によっては変更可能)

散布量：400l/10a

調査時期：散布前，散布21日後

(散布後の調査は多少前後してもよい。)

(必要に応じて期間中に追加の調査を行う。)

(微生物農薬等では，薬剤の特性にあわせて検討する。)

調査方法：試験実施ほ場において，防除対象世代の幼虫の寄生がみられる葉位を確認し，寄生虫数や当該世代以外幼虫の寄生状況などを総合的に判断して，採取・調査する葉位を決める。各区から調査葉40枚を任意に採取し，実体顕微鏡下で発育態別に寄生虫数・羽化済脱皮殻数を調査する。発生が少ないときは調査葉数を適宜増加する。(試験成績には40枚に換算して記す) 各薬剤(対照薬剤を含む)の防除率の計算は次式による。

$$\text{防除率(\%)} = \left(1 - \frac{Cb}{Tb} \times \frac{Ta}{Ca}\right) \times 100$$

ただし，Cb = 無処理区の散布前の幼虫数の合計

Tb = 処理区の散布前の幼虫数の合計

Ca = 無処理区の散布後の3，4齢幼虫・羽化済脱皮殻数の合計

Ta = 処理区の散布後の3，4齢幼虫・羽化済脱皮殻数の合計

(注1：幼虫・羽化済脱皮殻数は3区平均値)

(注2：冬期試験の場合は，発生の現状にあわせて変更する)

対照薬剤：原則として下記の中から選んで採用する。

アプロードエースフロアブル（プロフェジン 20%，フェンピロキシメート 4%） 1,000 倍
 ハチハチ乳剤（トルフェンピラド 15%） 1,000 倍
 ダニゲッターフロアブル（スピロメシフェン 30%） 2,000 倍
 トモノール S（冬期試験）（マシン油 97%） 50 倍
 トモノール S（夏期試験）（マシン油 97%） 100 倍

発生状況記載方法

(1) 原則

薬剤処理時期を中心とした試験期間中の試験圃場における発生状況を「甚・多・中・少・無」で記載する（平年並のような表現は避ける）。接種又は放虫によって試験をおこなった場合は明記する。

(2) 茶害虫の場合の特例

上記原則のアンダーラインの部分を下記の数値で代用し「甚・多・中・少・無」で記載する。

1) チャノコカクモンハマキ、チャハマキ、チャノホソガ、ヨモギエダシャク及びツマグロアオカスミカメの場合
 調査時の無散布区の平均虫数（捲葉数，被害芽数）で代用する。

「甚・多・中・少・無」の階級は「発生予察調査実施基準」に従う。

発生時期（発蛾初日，発蛾最盛日など）については従来どおり記載する。

2) カンザワハダニの場合

散布前調査の各処理（無処理を含む）の成・幼若虫数 3 区合計の平均値で代用する。発生程度の階級値は表 1 による。

表 1

薬剤	区	散布前調査の成・幼若虫数				
		I	II	III	計	
A	剤	A ₁	A ₂	A ₃	A _s	n 個
B	剤	B ₁	B ₂	B ₃	B _s	
⋮		⋮	⋮	⋮	⋮	
⋮		⋮	⋮	⋮	⋮	
⋮		⋮	⋮	⋮	⋮	
対 照 薬 剤		C ₁	C ₂	C ₃	C _s	
無 処 理		D ₁	D ₂	D ₃	D _s	

$$x = (A_s + B_s + \dots + C_s) / n$$

（1 区 20 葉調査の数値，又は 20 葉当たりの換算値を用いる：したがって，A_s ⋯ D_s 及び x は 60 葉当たりの数値になります）

表 2 カンザワハダニの発生程度の階級値の目安

階級値	散布前調査の虫数 3 区合計の平均 (x)
少	99 以下
中	100～399
多	400～999
甚	1,000 以上

但し，x は表 1 のように計算する。

注）表 1 の数値は昭和 60～平成元年度茶農薬連絡試験成績より勘案して作成した。

3) チャノミドリヒメヨコバイの場合

散布前調査の際の無散布区の平均値で代用する。

発生程度の階級値は、「発生予察調査実施基準」に従う。

注)：「発生予察調査実施基準」には“たたき落し法”による階級値のみが掲載されている。“すくい取り法”による場合は次式によって換算し目安とすることができる。

$$Y=1.81x+4.46$$

$$x=(Y-4.46)/1.81$$

但し、x：たたき落とし虫数 Y：すくい取り虫数

なお、サクソンキャッチャーや電動掃除機を用いた場合は担当者の経験によって階級値を設定してよい。

4) チャノキイロアザミウマの場合

散布前調査の際の無散布区の平均値で代用する。

発生程度の階級値は「発生予察調査実施基準」に従う。

注)：「発生予察調査実施基準」には“たたき落し法”による階級値のみが掲載されている。“茶芽読取り法”による場合は次式によって換算し目安とすることができる。

$$Y=0.8037x+0.45$$

$$X=(Y-0.45)/0.8037$$

但し、x：たたき落とし法の虫数 Y：茶芽読取り法の虫数

5) コミカンアブラムシの場合

散布7日後の調査の際の無散布区の平均値で代用する。

発生程度の階級値については担当府県の基準による。

6) クワシロカイガラムシの場合

調査時の無散布区の平均値で代用する。

発生程度の階級値については担当府県の基準による。

7) チャトゲコナジラミの場合

発生程度の階級値の算出方法は、以下のとおり。

調査方法：調査ほ場の任意の20ヶ所において、茶株のすそ部の古葉が着生している部分の枝条を、葉裏が見えるように手でめくりあげて葉裏を見渡し、寄生葉を見取り調査する。

調査部位ごとの寄生程度は下表に基づき指数化する。

程度	指数	1ヶ所あたりの寄生程度
多	3	半数以上の葉に寄生がみられ、かつ寄生虫数が著しく多い（概ね、50頭以上/葉）
中	2	半数以上の葉に寄生がみられる
少	1	半数以下の葉に寄生がみられる
無	0	寄生がみられない

〔平均寄生程度の算出式〕

$$\text{平均寄生程度} = \frac{0 \times N_0 + 1 \times N_1 + 2 \times N_2 + 3 \times N_3}{20 \times 3} \times 100$$

N₀：上表の指数0のヶ所数。以下同様。

発生程度別基準：

程度	平均寄生程度
無	0
少	1～40
中	41～60
多	61～80
甚	81以上

調査手順：1ほ場20ヶ所について各調査か所の寄生程度を指数化し、調査ほ場の平均寄生程度を求める。発生程度別基準に照らして、調査ほ場の発生程度を決定する。

(3) 発生予察調査実施基準

a. チャノココクモンハマキ, チャハマキ

程度	1 m ² 当たり幼虫数
無	0
少	1～5
中	6～15
多	16～35
甚	36以上

b. チャノホソガ

程度	1 m ² 当たり巻葉数
無	0
少	1～30
中	31～100
多	101～250
甚	251以上

c. ヨモギエダシヤク

程度	1 m ² 当たり幼虫数
無	0
少	1～4
中	5～15
多	16～30
甚	31以上

d. ツماغロアオカスミカメ

程度	1 m ² 当たり被害芽数
無	0
少	1～25
中	26～80
多	81～160
甚	161以上

e. チャノミドリヒメヨコバイ

程度	被害芽率 (%)	4 か所当たりたたき落とし虫数
無	0	0
少	1～5	1～8
中	6～15	9～20
多	16～30	21～40
甚	31以上	41以上

f. チャノキイロアザミウマ

程度	4 か所当たりたたき落とし虫数
無	0
少	1～40
中	41～120
多	121～240
甚	241以上

判定基準

- 1) 効果の判定は対対照・対無処理・判定の3項目にそれぞれA・B・C・D・?と表記する。対対照と対無処理の評価は独立に考える。?は虫の発生が非常に少ないなどの理由で判定不能の場合なので特に説明しない。
- 2) 実用性と簡便性を考慮して、原則として防除率を用いて判定をおこなう。防除率は調査時の虫数を用いて次のように計算する。

$$\text{防除率 (\%)} = (1 - \text{Ta}/\text{Ca}) \times 100$$

Ca：無散布区の虫数 Ta：散布区の虫数

チャノコカクモンハマキ，チャノホソガでは捲葉数を用いて計算する。

カンザワハダニ，サビダニ類，チャノホコリダニの防除率は附12のカンザワハダニ防除試験方法に準ずる。

ヨモギエダシャクの室内試験の場合は補正死虫率を防除率と同じに扱ってよい。

ツマグロアオカスミカメの防除率は被害芽数を用い計算する。

クワシロカイガラムシについては肉眼観察により多，中，少，無に区別し，特に防除率は計算しない。

チャトゲコナジラミの防除率は附15の試験法に準ずる。

対 対 照

記 号	効果の判断	計算法	判 定 基 準
A	効果がまさる	①	10%以上高い
		②	10%水準で有意にまさる
B	効果がほぼ同等	①	10%未満の差
		②	10%水準で有意差を認めず，防除率が対照と同等か高い
C	効果がやや劣る	①	対照に比べ10%以上20%未満低い
		②	10%水準で有意差を認めず，防除率が対照よりも低い
D	効果が劣る	①	対照に比べ20%以上低い
		②	10%水準で有意に劣る

〈計算法〉

①：成績のとりまとめに用いた数値が防除率の場合

②：成績のとりまとめに用いた数値が虫数または被害芽数，被害芽率による統計検定の場合

対無処理

記 号	効果の判断	評 価 基 準		
		害 虫 I	害 虫 II	害 虫 III
A	効果は高い	85以上	90以上	80以上
B	効果はある	70～85	75～90	65～80
C	効果は認められるがその程度はやや低い	55～70	60～75	50～65
D	効果は低い(ない)	55未満	60未満	50未満

注) 害虫I：チャノコカクモンハマキ，チャハマキ，ヨモギエダシャク，カンザワハダニ，コミカンアブラムシ，ツマグロアオカスミカメ，チャトゲコナジラミ，チャノホコリダニ，サビダニ類，ハスモンヨトウ，マダラカサハラハムシの場合

害虫II：チャノホソガの場合

害虫III：チャノミドリヒメヨコバイ，チャノキイロアザミウマの場合

両種とも虫数による防除率及び被害芽による被害防止率を計算するが，原則としてチャノミドリヒメヨコバイは被害防止率を，チャノキイロアザミウマは防除率を主体として判定する。

概評の備考欄にチャノミドリヒメヨコバイは被害防止率，チャノキイロアザミウマは防除率を記載する。

Ⅲ 薬臭試験

試料調整法

供試品種：やぶきた（やむを得ないときは他の品種でも可）

試験時期：原則として一番茶期

試験区および面積：① 薬剤処理区

試験計画書を参照（薬剤ごとに処理日が異なるので注意する）。

② 摘採1日前処理区

陽性対照区として必ず設ける。

③ 無処理区

複数薬剤処理した場合でも無処理区は共通（1点）でよい。

④ 面積 各区とも試料 200 g を製造するに十分な面積とする。

⑤ 反復 なし

薬剤散布：噴霧機等を用いて所定の薬量（原則として 200 l/10 a，ただし，対象とする病害虫の試験法に定められている散布量が異なる場合はそれに準拠する。）を，均一に散布する。散布は各 1 回とする。

注：散布に際しては飛散等による他区への影響に十分注意する。試験期間中は他剤の散布は行わない。

被 覆：寒冷紗（#610）を用いて，光線透過率 45% 程度の間接被覆を，摘採 10 日前から摘採まで行う。

摘 採：はさみまたは手摘みにより，試験区から均一に摘採する。

製 茶：① 摘採した生葉はできるだけすみやかに製茶を行う。

② 製茶機は，原則として 2 kg 少量製茶機を使用する。

③ 製茶は緑茶の標準製法に従って行い，粗揉，中揉（または再乾）を経たものを乾燥して試料とする。

注：製茶は各薬剤とも処理濃度の薄い方から行うなど，製造中又は乾燥中は臭気への影響に十分注意する。必要に応じて製茶機の洗浄を行う。

最近，製茶工程上のトラブルと思われるサンプルの不具合が見られるので，より一層の注意をお願いしたい。

試料の送付等：

① 作成した試料は各区 100 g を茶罐又はアルミパックに密封する。このとき，移り香などが生じないように留意する。

② 各試料には試験区を明示し，できるだけすみやかに下記の送付先に送付する（着払い不可）。

送付先：国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構

果樹茶業研究部門 金谷茶業研究拠点 茶業研究領域

〒428-8501 静岡県島田市金谷 2769 TEL：0547-45-4692

③ 試験の概要および試験期間中の降水日数，降水量を表にして下記の送付先に送付する。

送付先：日本植物防疫協会 調査企画部 TEL：03-5980-2182 FAX：03-5980-6752